デジタルインクルージョン啓発と地域の公共施設活性化とを意識したイベントの企画と実施―多摩市立中央図書館との連携―

井上　淳　教授
（比較文化学部　比較文化学科）

【プロジェクトの背景と目的】

本プロジェクトでは、学生がデジタルインクルージョン啓発と地域（とりわけ地域の公共施設）の活性化とを意識したイベントを企画・運営することによって、地域（施設）の交流活性化、デジタルインクルージョンの認知度向上、学生の成長に寄与することを目指した。

視覚や認識、動作に困りごとをもつ人がデジタル世界で取り残されているという問題への取り組み（デジタルインクルージョン）は、諸外国と比べると日本においては進んでいるとはいえない。一方で、一部の公立図書館では近年、バリアフリーの書棚である「りんごの棚」が設置されており、今回の提携先となった多摩市立中央図書館も「りんごの棚」を設置している。

そこで、学生はデジタルインクルージョンに取り組むフランスのスタートアップ企業であるファシリティジャポン株式会社の助言を受けながら「イベントを通じたデジタルインクルージョン啓発」の方途を考え、提携先である多摩市立中央図書館での啓発イベントを企画・運営した。図書館は視覚や認識に困りごとをもたない人だけが一見利用しているように見えるが、多摩市立中央図書館では「りんごの棚」が設置されている。そんな多摩市立中央図書館を会場にして、次の世代を担う子どもを対象にして、デジタルインクルージョンの入口である「人の見え方はそれぞれである」ということを体感してもらうイベントを企画・運営した。

市立図書館の地域における役割、イベント開催数と利用者の多い多摩市立中央図書館が学生主催のイベントに期待していることを汲み取りながらデジタルインクルージョン啓発もおこない得るイベントを学生が検討することによって、提携先である多摩市立中央図書館にはイベントを通じた利用者や利用者同士の交流増加といったさらなる活性化という点で貢献しようとした。また、本学キャンパスが立地している多摩市の活性化、地域と大学・学生の連携発展にも貢献しようとした。さらには、本プロジェクトに参加した学生については、図書館担当者をはじめ社会人や地域の方と交流を通じて、地域関与意識の増進、協働する力の向上、自身が取り組んでいることに対するオーナーシップ意識の向上、学びへの還元を目指した。

【主な活動と成果】

（1）イベント企画立案と発表：　前期授業期間（4 月～7 月）
チームに分かれてそれぞれが企画を練り、7 月中旬に多摩市立中央図書館に企画提案を発表した。
【写真 1 参照】

（2）現地訪問と詳細打ち合わせ：　夏休み（8 月～9 月）
7 月の発表会で多摩市立中央図書館様から受けた企画提案に対する講評とコメントを受けて企画を改善した。学生チーム（2 チーム）はそれぞれその企画をもって多摩市立中央図書館を訪問し、机上の

打ち合わせに加えてイベント実施会場の視察を行い、イベント当日に関する打ち合わせをした。多摩市立図書館訪問後は、打ち合わせと視察を踏まえてイベントに向けた最終準備をおこなった。

（3）実際のイベント実施：　10 月

10/5 と 10/11 に、2 つのイベントを多摩市立中央図書館で実施した。【写真 2 参照】

10/5 には「いろもじ探検隊！」と題して、鏡文字を使ったゲームや色眼鏡をかけて（色がついた）輪投げに挑戦するといった 4 種のゲームを周回してもらうイベントを実施した。イベントを通じて、人によって見え方が異なることを体感してもらった。【写真 3 参照】

10/11 には、「もじのせかいとふしぎなメガネ」と題して、鏡文字が書かれたカードを使った神経衰弱のようなゲーム（30 分を 2 回）、そして、色がついたメガネを工作してそのメガネを使ってカードに描かれている絵の色をあてるワークショップを（60 分）実施した。【写真 4 参照】

いずれのイベントにおいても多くの参加者があり、学生が主体となってイベントを運営し積極的に参加者や引率者にはたらきかけることによって、地域の方（参加者である子どもやその引率者）と交流をすることができた。イベント実施後にプロジェクト責任者と多摩市立中央図書館担当者とでおこなったふりかえりでは、図書館で開催するイベントとしての新しさと意義が見出され、今後も連携を続けていく方針を確認することができた。参加した学生からは、インターンより長い期間、責任のある形でイベントに携わることができたことに意義を感じたという声があった（ふりかえりアンケートより）。



写真 1：企画発表会の様子



写真２：イベント告知（図書館掲示板）



写真３：10/5 のイベントの様子



写真４：10/11 のイベントの様子